『キマイラ文語』を読む会　嶋稟太郎

Ⅰ 心の変化を抑圧するもの

『キマイラ文語』の特色は「短歌の歴史は口語化の歴史」と宣言した点にある

前衛短歌に触れずに、正岡子規とニューウェーブ世代を一冊のなかに並べているのが象徴的。

名詞は何でもあり、動詞や形容詞の意味は現代語そのもの、しかし動詞・助動詞の活用や助詞の用法は完璧に…。これが現代文語であり、まさにキマイラ的言語なのだ。P9

川本の印象は時枝誠記の整理（いわゆる時枝文法）とほぼ一致する。

名詞・動詞・形容詞→「詞」、助動詞・助詞・動詞の活用（接辞の「た」）・感動詞→「辞」

「詞」は客体的表現。「辞」は主体的表現で「話し手の持っている主観や感情や意志そのものを、客体として扱うことなく直接に表現した語」（三浦つとむ『日本語はどういう言語か』講談社学術文庫 P77）**言葉を包み込む「辞」には主体の心の反応が表れる。**

「詞」＝素材の変化は「口語短歌」と呼ばれなかった

「辞」＝　心の変化は「口語短歌」と呼ばれた　（本来の「口語」は話し言葉＝俗語のこと）

短歌には「詞」と「辞」で説明できない領域（短歌技法）がある

「調べ」、「形（フォルム）」（定型・句跨り・句割れ・破調など）、「芸（テクニック）」（掛け言葉・折句など）

前衛短歌は「詞」を変えながら短歌技法を駆使したので「口語短歌」ではない？

歴史から見ると「詞」の変化は早く「辞」の変化はゆっくり

戦後の経済成長のスピードに対して、心の変化はゆっくりだったのではないか。

バブルの時代に「詞」はピークに達し、本格的に「辞」を変化させる子供たちが現れる。

俵万智は軽やかで開放感のある「辞」の嚆矢となった。

「嫁さんになれよ」だなんてカンチューハイ二本で言ってしまっていいの

俵万智『サラダ記念日』1987

曲線は未来へ伸びて、ねえ、アレクサ、何人の犠牲で済むか計算できる？

平出奔『了解』2022

短歌独特の概念である「口語」は近代で完成した様式から外れた言葉＝異端の言葉であった。

「口語」と呼んで「文語」とを対立させるとは、実は、心の変化を抑圧していたのではないか？

社会的強者＝大人＝文語 vs 口語＝大人ではない存在（子供）＝社会的弱者

II ニューウェーブ世代の現在から見る子供の発見

加藤治郎と穂村弘は少年時代に行ってしまった。

息、きらし、息をきらして、霧の中から駆けてきたのは、紺のズックだ
冬のプールに水みちている小学校にひとり立ち居りここは記憶か

加藤治郎『海辺のローラーコースター』2022

ゆめのなかの母は若くてわたくしは炬燵のなかの火星探検
スイミングスクールへゆく透明のバッグのなかの抜け殻の蟬

穂村弘『水中翼船炎上中』2018

大人のまま子供でいていいし、役割語の仮面をかぶせたり手紙形式で客体化しなくてもいいよ?

III「辞」の現在

小池光は近代文語の最後の変革者だったかもしれない

われ病んで仰向けにをれば現身の菊池寛君も突如としてほとけ　斎藤茂吉『つきかげ』1950
青森の吉幾三が作りたる小学校の校歌よき歌　小池光『サーベルと燕』2022

文末の「た」のは単調なのか　〜「時は流れ『た』」を受けて〜

一度だけ「好き」と思った一度だけ「死ね」と思った　非常階段

東直子『春原さんのリコーダー』1996

短歌は散文と異なり一音一音が喩着（「癒」着でなく）し、「た」の主観的な判断（モダリティ）を読者に読み取らせようとする。このときミラティヴィティ（期待のない発見）があらわれる時がある。このような「た」は散文の書き言葉や話し言葉では成立しにくい。

例：［列車で、向かいの座席に人間の顔にホクロを発見して］

a　あ、あんなところにホクロがある。

b　あ、あんなところにホクロがあった。　↑　もともとホクロを探してないと不自然。

定延利之編『日本語学と通言語的研究との対話 テンス・アスペクト・ムード研究を通して』P21

最近の歌から見る短歌技法、「詞」と「辞」の境界

共感じゃない方法で　わかってる　八十億でも見つけてみせる

乾遥香「ニューロマンチズム」ぬばたま第八号 2023

冷房の効いてるところ独特の匂い　ブラック・マジシャン・ガール　青松輝『4』2023

伸びきった昼の終わりは暮れてゆく中野と中野からの各駅

山階基『夜を着こなせたなら』2023